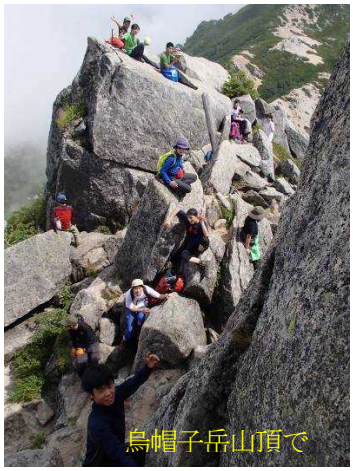
不定期刊行　　第519号　2014.08.21

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町高等学校

雨と風の裏銀座

大町高校の夏山縦走は3泊4日の日程で裏銀に出かけた。13日、朝5時に学校集合。小生自身は、前日までＩＨで箱根に行っていたので、準備はすべて副顧問と生徒に任せた。今回は生徒7（男子5、女子2）、顧問2に加え、昨年まで池工のコーチをお願いしていた山内さん（北ア北部遭対協所属）に同行をお願いし、総勢10名での山行である。町の暑さとは無縁とばかりに高瀬ダムのサイドは寒いほど。しかし、ブナ立て尾根の暑さは折り紙付き、登山口の水場で水を補給し、ゆっくりと登って行く。いくつかのパーティと相前後しながら5時間のアルバイトで烏帽子小屋に到着した。小屋に着くと、小屋主の上条さんが「西瓜をどうぞ」とお盆に一杯出してくれた。生徒たちがむしゃぶりついたのは言うまでもない。実はこの西瓜、息子同様遭対協の隊員でもある山内さんのご父君が先発して小屋の皆さんに差し入れしてくれたものだったのだが、志をありがたく頂戴した。テントを張って腹ごしらえをしたあとは、烏帽子岳へ。西に水晶、薬師、北には針ノ木、東には唐沢岳が存在感を示している。そこからは裏銀座と対峙する表銀座の稜線が大天を頂点に続いている。今回の山行で最初の頂上で、山岳部歌を歌い明日からの好天を祈った。


烏帽子岳山頂で

14日は4時半にテン場を出発。三ツ岳のお花畑を見ながら野口五郎へと向かうが、次第に表銀座の山々がガスに覆われてきて視界が利かなくなり、風も強くなって、いつか我々もガスに巻かれてしまった。7:15野口五郎小屋着、ここでも山内さんの顔でコーヒーをサービスしてもらうという歓待を受けた。8:00出発、15分には野口五郎岳山頂着。ここからは、しっぽりと濡れるようなガス、時には雨も降る中、強風にも襲われながら水晶を目指した。11:10 水晶小屋着。雨風に打たれ若干消耗気味の女子を残し、男子隊は水晶へ。ガスの中で何も見えなかったが、男子は精神的にも肉体的にもかなりタフ、この荒天にもまったくひるむことがない。一方で急激に標高の上がったこともあってか、女子は待っている間、ツェルトにくるまっていたのだが寒さを訴えた。加えて1年生の男子が一人、水晶からの下山を始めたところで急に呼吸が苦しいと言い出し、不調を訴えた。そこで、ここで隊を2つに分け、鷲羽を越える男子隊と岩苔乗越から源流を通る女子＋1隊に分け、僕が後者についた。三俣山荘に着いたのは、男子が早かったが、15:30には全員が再び合流した。不調の男子は急性高山病の恐れも疑われたので、診療所で診てもらい、2 時間半ほど休ませてもらった。極度の疲労と悪天に、精神的なものも加わってのことが原因と推察されるが、もう一人の1年女子生徒も極度に疲労しており、この日の行動が1年生にとっては、厳しい洗礼となった。結果的には事なきを得たが、そ

んな一幕もあり、かなり緊張を強いられた。

夜半には猛烈な雨がテントを叩く音で何度か起こされたが、15 日撤収時には雨はあがっていた。予定より 20 分遅れの 4 時 50 分、ガスの中を槍ヶ岳を目指す。三俣蓮華からは、稜線を辿る道を選択したが、猛烈な風が吹き始め休む場所すらなかなかない。双六の頂上に着いたのは、7:21、強風で一瞬滞在した後、直ちに下る。ご存知の通り、双六の頂上は広い。避けるものとてない台上を吹き荒れる風と雨は、我々の体力を否応なく奪う。しかし、この悪条件下、生徒たちの精神力はたいしたものだった。ようよう辿り着いた双六小屋でも意気軒昂、先へ行く意欲は衰えることがない。昨日具合の悪かった 2 名も決して完璧に回復したわけではないが、頑張っている。双六小屋では、通過する登山者にも小屋を開放し、休憩所を設けてくれていたので、いったん小屋の中に入り、温かいものを飲んで善後策を検討することにした。リーダーにその旨を伝え、山内さんと二人で樅沢方面への偵察を試みた。しかし、・・・小屋から出て稜線に出た瞬間に二人で顔を見合わせた。この先西鎌へ行くのは無理、衆議一決。生徒には、「撤退の勇気、山は逃げないこと、明日の天候の回復も見込めない中、槍を越えるのは断念すること」を告げた。実は、今回のメンバーの中に 3 年生の女子が一人いた。彼女は全校登山の時、大学見学と重なってしまい槍ヶ岳をあきらめざるを得なかった。しかし、どうしても槍ヶ岳に行きたいという思いから、今回無理をして日程を繰って参加していた。その思いを知っていただけに、この決定は辛かった。だが、山は天気が一番、この天候の中、先へ行くという選択肢はなかった。辛い思いを胸に、10:00 鏡平へ下り始めた。さすがに標高を下げると風は弱まったものの、今度は雨の降り方が半端ではない。恐らく時間降雨量 20 ㎜は越えていただろう。衰えることのない雨の中、ひたすら下り、11:30 に鏡平小屋に到着。ここで、明日上高地に迎えに来てもらうことになっていたジャンボタクシーを今日新穂高に回してもらうように変更をお願いした。なんとか変更もできたので、11:55 に小池新道を下山を開始。鏡平を出てすぐに大変な道になっていることが知れた。普段は水のない登山道が濁流と化していたのだ。それまで生徒を先頭に歩いていたのだが、ここからは僕が先頭に出て、殿を山内さんに任せた。衰えることのない雨の中、ずぶぬれになって 15:35 新穂高温泉に到着した。

双六小屋の前で、撤退

濁流と化した小池新道を行く

それにしてもなんとタフな生徒たちだろう。全く弱音一つ吐くことなく、荒天の山を楽しんで最後まで山を去るのを惜しんでいた。山岳部歌は、烏帽子で歌ったのが最初で最後だったが、山がホントに好きなんだと思わせる生徒たちは、槍ヶ岳の山頂に立つのとはまた違った貴重な体験で大きくなった。

翌日、僕らの下った左俣とは中崎尾根を挟んだ右俣の滝谷出合で、水に流されて貴重な 3 人の命が失われたという事故のニュースが新聞やテレビで報道された。